

高句麗千仏信仰の系譜

— 延嘉七年造像銘の検討 —

門田 誠一

〔抄録〕

紀年銘のある高句麗の金銅仏として知られる延嘉七年己未銘金銅仏に関して、従来は紀年の比定が論究の中心であった。これに対し、近年、釈読の進められている中国北朝代石窟の千仏図像の傍題に関する研究によって、千仏図像がいくつかの仏典に依拠することが明らかになってきた。それらは主として仏名経類であり、その内容が千仏図像として可視化されている。いっぽう、延嘉七年己未金銅仏銘文には「第廿九因現義仏」の語があり、これは仏名経の一つである『賢劫経』にみえる仏名であることが知られて

いる。この仏像の制作年代は六世紀代とみられており、この時点で仏名経類に基づく仏像表現は敦煌莫高窟などの北朝石窟に限られることから、延嘉七年己未金銅仏銘文によって同様の信仰を実修していたことが明らかで高句麗の仏教が北朝の影響下にあったことを論じた。

キーワード 高句麗、仏教、延嘉七年銘金銅仏、千仏、仏名経

はじめに

朝鮮三国時代の金石文のなかで、仏教信仰の実態を示す資料として金銅仏の銘文がある。この種の銘文には造像の目的などとともに紀年や干支が記されていることが多く、これによって時期を特定した仏教信仰の実態を知ることができる好個の資料となっている。

ただし、三国時代の金銅仏は発掘調査で出土することはほとんどなく、不時発見であるため、出土地点および出土状況が明らかでないことが多いのが難点である。そのため三国時代において時期によって配した国家が異なる地域の場合は、当該の金銅仏が、いずれの国に帰属するかを確定し難い場合がある。のみならず、伝・忠州（発見時の地名は中原郡老隠面）出土の建興五年銘金銅光背などのように、発見

地が当初は百済に属すと考えられていたが、その後の中原高句麗碑の発見により、高句麗の領域であることが判明した事例もある^①。さらに、この地は五四〇年代には真興王の進攻によって新羅の領域になるのであるから、この資料は発見地の史的状況の変化が仏像の制作の背景を考える際の条件となることを端的に示している。

このような金銅仏の製作地に関して、本論でとりあげる延嘉七年銘金銅仏は光背の銘文に「高麗東寺」の語があることから、高句麗で制作されたことがわかり、「延嘉七年歳在己未」という紀年干支とともに、時期と地域の明らかかな仏像として重要であり、三国時代の仏教研究に大きな位置をしめる

のみならず、銘文には「賢劫千仏」の語がみえることから、この造像の背景には賢劫千仏に関係する仏名信仰があり、さらにそれに続く「因現義仏」によって依拠した經典が特定できることから、六世紀代の高句麗で実修された仏教信仰が具体的に知られる稀有な資料である。本論では、これまであまり言及されることなかった高句麗の仏名信仰のなかでも、とりわけ千仏を対象とした信仰に対して、その系譜と意味を中国・北朝石窟の千仏図像とその題記等との比較検討を通して系譜を論じ、さらに信仰の内容にまで踏み込んで考察を行う。

一 千仏信仰を示す造像銘

延嘉七年銘金銅仏は一九六三年七月一六日に慶尚南道宜寧郡大宜面下村里（当時）で村民によって発見された。全高一六・二センチメー

トルの小型の金銅仏で、舟形光背と台座があり、現状で光背の一部に鍍金が残存している。光背先端部の歪みがあるほかは全体的に保存状態はよい^③。

仏像は細長い体軀で、厚い通肩の法衣が表現されており、体軀に比して手足や顔が大きい。また、身体の輪郭はほとんど現れておらず、服の裾は左右に鋭く伸びており、胸の上には斜めにかけて內衣と帯の組紐が表現されている。こうした法衣形式は五世紀末頃の北魏時代の仏像に現れる要素であり、それに高句麗の仏像様式が反映されている作品と推定され、雲崗石窟の六世紀初頭紀年銘の仏像のいくつかと類似するとされている^④。

様式に関しては、この仏像は服飾が漢化しており、そのことから太和一八年（四九四）に北魏の孝文帝が漢化政策をとり、漢族の服制を採用する以前の制作とは考えられないとして、延嘉七年はこれ以前ではなく、五三九年とする見解もある^⑤。

この金銅仏の光背には鑿などによる陰刻で四行四七字の銘文が刻まれている。銘文は現状では以下のように釈字・釈読されている^⑥。

延嘉七年歳在己未高麗国楽浪 東寺主敬弟子演師徒册人 共造賢
劫千仏流布第廿九因現義仏比丘□□一所供養

銘文の釈字・釈読についての諸説は『韓国古代金石文資料集』^⑦に詳細に整理されている。これを参照しつつ銘文の釈字と釈読について、諸説を整理してみると、銘文の字句の異見としては「第廿九」の次の

文字を、「回」と読み、「現」に続く字を「歳」と解し、「第廿九回現歳仏」とする釈字する説があった。しかしながら、この文字を含む仏名が『賢劫経』に依拠した仏名である「因現義仏」と釈読する説が出されて以降は、これが一般的な読み方になっており、本論もこれに従い、「因現義仏」の仏名とその依拠経典を認めたくうえで立論している。

また、最終行の「比丘」に続く二字については釈字が一定せず、類例の少ない特異な異体字の可能性が高く、意味も未確定であるため、ここでは一応未釈としておくが、本論の論旨に影響はない。

この銘文にみえる「延嘉七年己未」年については、高句麗でも四世紀代とする説から高麗時代とする説まで諸説が出されているが、前述のように像容などから六世紀代の造像とみられる。その場合、干支からは五三九年と五九九年の両説があるが、銘文にみえる「因現義仏」の依拠経典である『賢劫経』は西晋の竺法護の訳であるから、この点のみから五三九年であるか五九九年であるかを決定することは難しい。ただし、この金銅仏の像容が六世紀代に入ること前提とするならば、後に触れる中国における仏名信仰に基づく千仏表現の信仰の初現資料が五世紀前半であり、六世紀にかけて盛行することからみて、現状では五三九年である可能性が高い。また、銘文にみえる「延嘉」に関しては干支と像容による制作年代の推定と、「高麗国楽浪」の語から、高句麗の年号であるとみられている⁹⁾。

銘文の内容は、この仏像が延嘉七年に高句麗の首都の平壤にある東寺の信徒四〇人が発願して作った賢劫仏の中で二九番目の仏像として造成された因現義仏であり、彼らがともに造像し、供養した、という

内容である。このような銘文の内容を通して、高句麗には千仏信仰が存在し、この仏像の名称は千仏のうち二九番目の因現義仏に該当する仏であるという重要な事実を知ることができる。

二 延嘉七年金銅仏銘に関する従前の研究

延嘉七年金銅仏銘については、発見されて以降、基本的な検討がなされたが、ここでは本論の考察目的である高句麗における仏教信仰の内容にかかわる先行研究を学史的に整理しておく。

まず、延嘉七年金銅仏銘に現れた仏教信仰を考究する際に鍵となるのは、やはり「第廿九因現義仏」の語である。すでに瞥見したように、この語については、西晋・竺法護の訳になる『賢劫経』に賢劫千仏としてみえる仏名の二九番めに現われる仏名であることがわかっており、この金銅仏を造像する際の所依経典は、数多ある千仏を説く経典および仏名経類のなかで、西晋・竺法護訳の『賢劫経』であることが証された¹⁰⁾。いっぽう、この「第廿九因現義仏」は、自余の千仏経典および仏名経類においても、北魏・菩提流支訳『仏説仏名経』では「見義仏」として見え、別本『仏説仏名経』と『現在賢劫千仏名経』では功德(明)仏としてみえる仏と同一であるとみられている¹¹⁾。

これらの経典と銘文にみえる「千仏流布」の語によって、高句麗では千仏信仰が行われていたとされている。もちろん、この延嘉七年金銅仏銘のほかにも六世紀代のもつとみられる金銅仏や光背の銘文の内容から、高句麗には弥勒信仰・阿弥陀信仰などが行われていたことがわ

かつており、これらとともに高句麗の仏教信仰の一つとして、延嘉七年金銅仏銘文にみえる千仏信仰もあげられることになる。¹³ 千仏信仰の具体的な実修に関しては銘文に「楽浪東寺」の語がみえることから、かつて楽浪の所在した高句麗の王都である平壤に所在した「東寺」という寺院で行われたことがわかる。

このような「賢劫千仏」への信仰は鳩摩羅什訳『弥勒大成仏経』や沮渠京声訳『觀弥勒菩薩上生兜率天経』などの結末である最終段に「賢劫一切諸仏」と見えることが説かれており、弥勒信仰と密接な関係があるとする見方がある。¹⁴

これらの銘文資料や出土遺物によって、高句麗ではおそくとも六世紀初めには平壤を中心として千仏信仰が行われていたと考えられている。

いっぽう、本論で千仏と称する仏教信仰の内容についても先行研究を瞥見してみると、千仏という言葉は凶像などの表現形式として用いられることが主体であり、凶像以外の千仏は仏名信仰として把握されることが一般的である。そして、その依拠經典である『仏名経』類は、千仏万仏の名号を羅列した経巻であって、これらの名を誦誦する時には過去に犯した種々の罪障が消滅することが説かれており、種類も多いが、その大部分は偽経に類しており、西域の仏教とも深い関係があるとされる。¹⁵ あるいは、『仏名経』類については、端的には多くの仏名を羅列した經典であるが、そこに懺悔滅罪の文が加わっている經典もあり、諸仏出現の世界や功德、その因縁を説いた經典とその抄出や変形を含んでおり、それらの成立は大乗經典としては相対的には新し

く、あるいは偽経であるとされる。¹⁶

延嘉七年金銅仏銘に示された信仰内容に関しても「賢劫千仏」などの語から千仏信仰とされており、以下にふれる北朝石窟などに表現された千仏凶像と同様に仏名經典類に依拠した基づいた千仏信仰と措定して論を進める。

三 北朝石窟の千仏信仰と高句麗

延嘉七年銘金銅仏銘にみられた具体的な仏名信仰および千仏信仰に関しては、北朝代に盛行した石窟寺院の造仏思想と比較検討してみたい。北朝石窟の千仏凶像は西秦・建弘元年（四二〇）の墨書銘のある炳靈寺第一六九窟を嚆矢として五・六世紀頃に盛行する。北朝代の千仏凶像のあるその主要な石窟をあげると、敦煌莫高窟・炳靈寺・文殊山（酒泉）・金塔寺（張掖馬蹄寺石窟の一つ）・麦石山・雲崗・洛陽・龍門・鞏県・響堂山などが知られている。¹⁷ 敦煌莫高窟で千仏凶像のある主要な石窟としては、北魏中頃にされる二五四窟、二五七窟、二六〇窟、二六三窟、西魏から隋までの四六一窟、四三八窟、四二八窟、二九六窟、二九九窟、三〇一窟などがあり、詳細な時期比定の難しいものとしては、北朝代とみられる三〇二窟、四一九窟、四二三窟、四二七窟、四一七窟などが知られている。莫高窟の千仏凶像は隋唐代にもみられるが、北朝代の千仏凶像に関しては五世紀後半から六世紀末頃までが盛行期であることがわかる。¹⁸

このような千仏凶像およびその背景となる信仰には依拠する經典が

多種類があり、それらの代表的なものをあげても、『賢劫千仏』、『三千仏名経』、『法華経』、『過去五十三仏名経』などがあるとされる。²⁰⁾ただし、図や像としての表現の場合は依拠経典の不明な場合も多い。よってここでは、これらに基づく多仏信仰を千仏信仰と仮定しておき、依拠する経典が判明する場合は、それを示すことによって論をすすめる。

北朝代の石窟寺院に表現される千仏は壁面や塔柱など壁画や塑像として多数の小仏で構成されることから、この種の造形は一般的に千仏図と称される。これらのうち、造形表現の背景となった仏教信仰を示す事例として、敦煌莫高窟では北朝代の第二五四窟で数多くの墨書傍題が発見されており、²¹⁾その他では五代の所産とされる第九八窟でも墨書傍題がみられる。

このうち北朝代の造窟になる第二五四窟は彩色壁画で描かれた千仏図に墨書傍題として仏名が記されており、それらが仏名経に基づくことが知られている。ここでは現存で壁面や窟頂部などに一二三五体の仏像が描かれておりの傍題の分析によると、これらの千仏図の傍題のうち、識別できるのは六一四体であるが、そのうち『過去莊嚴劫仏名経』にみえる仏名が約三分の二を占め、『未來莊嚴劫仏名経』にみえる仏名が約三分の一であるという。いっぽう、大正新修大藏経に『現在賢劫千仏名経』と敦煌遺書のなかの千仏名経写本にみえる仏名を参照すると、これらにみえるいわゆる現在賢劫の仏名は十分の一にすぎないとされる。その他にも、上記の仏名経類にみえる仏名と類似した仏名も記されていることが指摘されている。²²⁾このように敦煌敦煌莫高

窟第二五四窟では仏名の墨書傍題によって、この千仏の図像が『過去莊嚴劫千仏名経』、『現在賢劫千仏名経』、『過去莊嚴劫千仏名経』などのいわゆる三千仏名経に依拠した仏名信仰であったことが判明している。

このほかに千仏に類する多仏信仰に関係した依拠経典が推定される石窟としては、龍門・古陽洞の黄現德造像銘がある。この銘文には「大代永平四年二月十日 清信寺士五品使□黄現德 弟王奴等敬造弥勒像一軀并五十三仏為亡母 願亡母託生西方妙楽国土。(後略)」とあり、北魏・永平四年(五一一年)に黄現德が亡母の西方妙楽国土すなわち西方浄土への託生を願って、弥勒一軀と五十三仏を造像したとある。ここにみえる「五十三仏」の語から、南朝梁の僧祐の撰になる『出三藏記集』にみえる『過去五十三仏名経』、『五十三仏名経』などとの関係が想定されているが、これらの経はすでに失われており、現存する経典では『仏説藥王藥上二菩薩経』にみえる「五十三仏」などを参照し、これが北朝の造像に影響を与えたとする見方がある。²³⁾ただし、『無量寿経』では「五十三仏」の語そのものはみえないが、錠光如来が世に現れて以降の合計五十三の仏の名が列挙され、五十四番目が世自在王如来であり、この如来を師としたのが法蔵菩薩、すなわち後の阿弥陀如来である、と記されている。²⁴⁾すなわち『無量寿経』で過去五十三仏とされる諸仏であり、黄現德造像銘には「願亡母託生西方妙楽国土」の文章がみえるから、これに依拠する可能性がある。

また、書道博物館所蔵の黄□相造像碑には「大代延興二年歲在壬子四月癸未朔 六日戊子記書 学生東郡黄□相為亡父故使持節 侍中安南將軍 定州刺史 東郡簡公黄護頭造釈迦牟尼百七十仏 願亡父

楷是誠歲 永離苦難 便遇諸仏（後略）」とあり、北魏・延興二年（四七二）に黄□相が亡父の黄護頭が永く苦難を逃れ、諸仏に遇うことを願って釈迦牟尼仏百七十仏を造つたと記されている。ここにみえる「百七十仏」は『出三藏記集』にみえる『称揚百七十仏名経』によっている可能性が示唆されている。²⁶

このように仏名墨書傍題の他にも多仏信仰がみえることから、北朝の千仏図像といわれるものは、複数の依拠經典に基づくものであったことがわかる。実際にこれら以外にも、西秦・建興元年（四二〇）の墨書紀年があり、石窟図像のなかで最古の千仏図とされる炳靈寺石窟第一六九窟東壁の千仏図は多宝塔の図像部分に「多宝仏与釈迦牟尼□□」の墨書題記があることから、『法華経』に依拠した分身仏を意図したとみられている。²⁷

いっぽう、同じく炳靈寺石窟第一六九窟でも第六窟の十体の小座像群には「東方不動智仏」「南方智火仏」「西方習智仏」などの墨書題記があり、これらは『華嚴経』に依拠するとされている。²⁸ この他にも典型的な千仏図とは異なるが多仏を表現した作例として張掖・馬蹄寺千仏洞第二窟の十方仏は、「東南方無□」「西南方宝施仏」「西北方□□□」「□□方銘□□」とあり、「西南方宝施仏」は『観仏三昧経』の「念十方仏」としてみえることから、その他の仏名も、これに依拠する十方仏であることがわかっている。²⁹

典型的な事例をあげてみてきたように北朝石窟の図像にみられる多仏の表現は、それぞれ特定の經典に依拠して表現されたものであって、そのなかでも千仏図像は仏名経の内容を可視的に表現したものと考え

られる。³⁰ これらの実例に現れているように石窟の傍題や造像銘などの仏名から、北朝では特定の經典に依拠した千仏図や造像が盛行したことが知られた。

いっぽう、同時期の南朝では石窟そのものの造営が稀少であるうえに、千仏図像は顕著ではない。南朝石窟の典型としてあげられる南京・棲霞山石窟をみても、梁の天監一五年（五一六）の作とされる石造の無量寿仏の他に三尊仏や十六羅漢・金剛力士・四天王像などが彫刻されているが、千仏表現は明らかではない。³¹ また、四川省の石窟では広元・皇沢寺石窟の北周代とみられる塔廟窟の周囲の壁に千仏の彫刻があるが、これは開鑿当初の西魏あるいは北周のものとしてされる。³² これも千仏図像が北朝代に盛行したことを示す作例となる。

そもそも千仏図や千仏信仰の依拠經典を含めた仏名経の淵源に関しては大乘仏教の教壇において、仏の姿に精神を集中する念仏修行とは別に仏名の誦誦が始まって以降、仏名が崇拜の対象とされるようになったとされる。そして、仏名を扱った經典の特徴は、信者が仏名を誦し、崇めることはもとより、それらを聞くことによって前世の罪が清められ、功德をえられるばかりか、即座に救済されると説かれていることであるとされる。³³

仏名誦誦の意味は、これを行うことによつて、仏を身近に呼び寄せて、加護を願うことにあり、それは呪句である陀羅尼を唱えて、その崇拜対象を呼び寄せるのと同様の行為であると説かれる。実際に仏名の羅列はいわば音節の連続に過ぎず、誦誦する者にとっては、何の意味も持たず、その点は陀羅尼と変わるところがない。このような仏名

に対する信仰は、ここまでみてきたように中国では五世紀代に始まり、六世紀代に盛行したとされる。仏名信仰の仏教史上の位置づけに関して、仏名経類の成立についての先学の文献学的研究によれば、五・六世紀頃の経典目録において、仏・菩薩の名号に関する相当数の経典の題名が記載され、あわせて、特定の経典から抜粋された仏の名号の目録が掲載されていることが指摘されている。仏名経類は、おそらくは、このような名号の目録などをもとに作成されたと考えられている。³⁴

関連する事例として、六・七世紀頃の僧伝には称名による奇瑞がみえ、その典型としては隋から唐初にかけての僧である徳美（？）六三七）の事蹟があげられる。それによると徳美は懺悔儀式にあたって仏名を一つ唱えることに一回ずつ跪拝して、十二巻からなる「仏名経」の読誦を完遂したという。³⁵ また、夏安居における懺悔式において、徳美は最後の七日間に一日一回、一万五千の仏名を唱えた。そして、このように仏名を唱えることを繰り返し続けた徳美が、会昌寺に懺悔堂を建立した時に、懺悔儀式に欠けていた水を求めて祈ると、久しく涸れていた井戸から水が湧きだしたという。³⁶ 徳美に関わる奇瑞は、この他にもみえるが、いずれも仏名経を読誦したことによる。このような仏名に対する信仰は皇帝にもみられ、その典型として南朝では梁・簡文帝が千仏を対象とした誓願を行っていることがあげられる。³⁷

典型的事例をあげて南北朝期の仏名信仰をみてきたが、そのなかでも北朝では可視的表徴としての千仏圖像が盛行したことが特色である。このような南北朝期の千仏信仰の様相を参照すると、北朝で盛行をみた特定の経典に基づいた千仏の圖像やその仏名を記すという行為は、

延嘉七年己未銘金銅仏銘の内容と基本的に一致する。

このことから延嘉七年金銅仏銘に現れた仏教信仰の系譜を考察するならば、北朝で展開した仏名信仰が高句麗に流入し、千仏の造像を発願したことが想定される。その結果として造られたのが延嘉七年金銅仏銘に記された賢劫千仏の一つである「因現義仏」であり、この作例はたんに高句麗における仏名信仰の実修を示すのみならず、六世紀の高句麗において、仏名信仰およびそれを可視的に表現した千仏信仰という北朝の系譜をひく仏教信仰が行われていたことを端的に示している。

四 高句麗千仏信仰の内容と意味

延嘉七年金銅仏銘の内容の検討にもどると、五三九年の可能性がたかいとされる延嘉七年には、高句麗の楽浪地域において、東寺という寺院が建立されており、ここにおいて千仏信仰が行われていたことが記述されている。さらに、その千仏信仰の内容は、前項においてふれたように、「賢劫千仏」を造つて、そのなかでも特に「第廿九因現義仏」を「流布」すると釈読されている。すなわち、「賢劫千仏」のなかでも第二十九番目の因現義仏を流布した、とあるのであるから、銘文にいう「賢劫千仏」を造つたなかで、流布を特記した「因現義仏」は当然ながら、この銘文が記された金銅仏であると考えられる。³⁸

さらに、この銘文から類推するに、この時点で楽浪にあった東寺において、おそらく、延嘉七年銘金銅仏の他にも、千仏信仰のもとに

賢劫千仏の名を冠したいくつかの仏像が奉じられていたであろうことが想定される。

その根拠を検討する端緒として、銘文の「因現義仏」の出典を再考すると、『賢劫経』のなかでも巻六の「千仏名号品」にみえる内容が注意される。そもそも『賢劫経』は喜王菩薩の請問に対して、釈迦が八万四千の法門、仏の功德、賢劫千仏の諸因縁すなわち現在の住劫に現れる千仏の名称と経歴などについて述べたものである。その具体的内容は維耶離国の声聞・菩薩など大衆が集う説法場において、菩薩の行うべき三昧についての喜王菩薩の問いに対し、釈迦は了諸法本という三昧を得れば諸度無極すなわち諸波羅蜜を成就し、諸三昧門に入ることができ、無上正真の道におよんで最正覚を成ずることができると説くものである。⁴⁹この喜王菩薩の問いに対して、釈迦は諸度無極を得て、八万四千の諸仏門に入ることができるのは、今ここにいる菩薩・大士だけでなく、この賢劫ですでに無上正覚におよび最正覚をなし、この三昧の四如来以外に一千の如来である、と述べている。そして、喜王菩薩が、それらの如来の名を問うと、釈迦はこれに答えて、歎じて千仏の名号を説いた。加えて、すでにこの賢劫中に無上正覚におよび最正覚をなし、この三昧に学んで仏となる千仏の名号が列挙される。ここで「銘文」にみえる「因現義仏」は賢劫中で成仏した千仏の名号の一つとしてみえている。

すなわち、『賢劫経』千仏名号品の仏名は単なる羅列ではなく、釈迦が歎じて説く千仏の名号を衆生が聞いて受持し、諷誦することによって生死の罪が滅除されるという内容であげられている。これは釈迦

が説く諸仏名の称名による衆生の聞名、そして衆生の称名による聞名であり、すなわち聞名と称名による衆生の利益を説くために示された仏名とされる。

このような『賢劫経』における千仏は南無が付されないことが、その他の仏名経類との明らかな相違点であるといい、この点からも延嘉七年金銅仏銘の「因現義仏」の仏名がこの経に依拠することを示している。また、『賢劫経』の内容からは、千仏名号の一つである「因現義仏」のみが称されるとは考えられず、「銘文」に「高麗東寺」という地名と寺名が記されているように、高句麗の東寺において、おそらくはその他の仏名を記した仏像または画像が制作され、それらに対する信仰の実修として諸仏の名号を称えることが行われていたと考えられる。

すなわち、この金銅仏の銘文からは、楽浪の所在する高句麗の王都である長安城（平壤城）では、六世紀前半代には、寺院において『賢劫経』などの千仏信仰を説く經典にもとづいて結縁した知識たちが、千仏の一とみなした金銅仏を造立し、供養していたことがつぶさに読みとれるのである。

いっぽう、北朝代の千仏画像に対する信仰の意味については、『過去莊嚴劫千仏名経』の内容がしばしば参照される。すなわち、善男善女が三世三劫諸仏の名号を聞けば、歡喜して信樂（しんぎょう）し、声に出して朗誦し続け、誦誦して誇らず、あるいは他人の言う事を書写し、また、仏の形像を画き作り、香華や伎楽を供養し、仏の功德を贊嘆し、帰命頂礼し、至心に礼をなせば、すぐれて十方諸仏国土は珍

宝純摩尼珠が満ち、これらが積もって梵天に至る、とあり、⁽⁴⁾ 仏名を唱え、それらを文字に記し、造形として表すことによる功德が示されている。

そして、経に説くこの内容を実際に表現したのが石窟などの彫刻や絵画に表された千仏であるとする見方がある。それによると、『過去荘嚴劫千仏名経』に述べられた個々の信仰内容について、傍題は他人の言う事を書写する功用があり、図像は仏の形像を画き作ることにあたり、声に出して朗誦し続け、読誦するのは帰命頂礼し、至心に礼をなすことは塔廟の周囲を圍繞することにあたるのであって、これらに接し、また行うことよって僧侶や衆生が供養礼拝を実修したとみる⁽⁵⁾。

千仏図像の表現された塔廟型式の石窟が、『過去荘嚴劫千仏名経』に依拠しているとみるかどうかは、あくまでも十分条件としての要素であって、その他の可能性も否定できないが、千仏の図像と傍題によって、千仏または仏名を示す経典の思想を具現しようとしたことは疑いない。

現状で傍題の残存する千仏図像は敦煌莫高窟に顕著であるが、これを敷衍すると本来的に北朝代の千仏図像には傍題の有無とは別にすべからず依拠経典があり、これに基づいて描画され、あるいは造像されていたと考えられる。ここまで縷々述べてきたように五・六世紀の東アジアにおいて千仏信仰の盛行した北朝の影響のもとに、所依経典の種類については細部の違いをみせつつも延嘉七年銘金銅仏を制作した六世紀の高句麗では「因現義仏」を含む『賢劫経』に依拠した仏名信仰たる千仏信仰が奉じられていたのである。

結 語

本論では延嘉七年金銅仏光背銘について、銘文の語のうちとくに仏名経にみえる仏名に着目し、このような語を含む銘文資料について、仏名信仰およびそれを可視化した千仏信仰の観点から高句麗と北朝の例をあげて検討した。千仏信仰は個々の依拠経典に基づいており、その実修が千仏の表現や仏名の書写であるから、併行する時期の中国の南朝では千仏の表現が顕著でないという事実と照らしあわせると、『賢劫経』の示す信仰を具現化した延嘉七年金銅仏銘に現れた高句麗の千仏信仰は北朝の系譜をひくことを論じた。

以上のように本論では考古・美術資料とそこに見える文字資料によって、高句麗仏教の系統が北朝にもとめられることを証した。ただし、東アジアにおける古代仏教そのものが複雑な様相を呈していることから、これは高句麗仏教の実相の一端を考察したのにすぎないことは自明である。本論で扱った資料の分野は複数におよび、それらに対する識者の叱正を得て、考古資料を中心とした東アジア仏教の地域的展開についての検討を重ねたく思う。

〔注〕

- (1) 大西修也『日韓古代彫刻史論』(中国書店、二〇〇二年)一八〇―二一頁
- (2) 本論では仏名経類を所依の経典とし、それらを読誦することによって懺悔を実修する一般的な仏名信仰に対して、同様の経典に依りつつ、千仏に対して実際に図像としての描画や造像を行う類型を千仏信仰と指定した。

ただし、千仏圖像といっても、依拠經典は多様であるが、本論ではとくに過去・現在賢劫・未来からなる三千名経を中心とした信仰を千仏信仰と措定している。

北朝石窟の千仏圖像と依拠經典については、下記文献を参照。

梁曉鵬「第三章第三節千仏圖像与仏経」『敦煌莫高窟千仏圖像研究』(民族出版社、二〇〇六年)(中国語文献)

王静芬「仏名与懺悔」『敦煌研究』二〇一〇年第二期(中国語文献)

(3) この仏像と銘文に関する基礎的知見は下記の文献を参照。

金元龍「延嘉七年銘金銅如来像銘文」(『考古美術』五一九、一九六四年)(ハングル文献)

尹武炳「延嘉七年銘金銅如来像の銘文について」(『考古美術』五一〇、一九六四年)(ハングル文献)

黄寿永「延嘉七年銘金銅如来像」(『美術資料』九、一九六五年)(ハングル文献)

また、黄寿永氏は、この金銅仏が二次的な移動を経て、埋納された可能性を示唆している。

(4) 文明大「延嘉七年銘金銅仏立像と高句麗彫刻の様式」(『韓国文化』二一五、一九八〇年)

(5) 朱秀完「三国時代年号銘金銅仏像の制作年代に関する研究」(『韓国史学報』四四、二〇一一年)(ハングル文献)

(6) 黄寿永編『韓国金石遺文』(一志社、一九七六年)(ハングル文献)

なお、この金銅仏の像の種類については如来とする見方もあるが、本論では金銅仏としての一般的呼称を用いた。

(7) 韓国国史編纂委員会編『韓国古代金石文資料集』I(国史編纂委員会、一九九五年)(ハングル文献)

(8) この銘文にみえる「延嘉七年歳在己未」についての主な説については下記論文を参照した。

金煥泰「高句麗因現義仏像の铸成時期—延嘉・延寿の長寿王年号の可能性試考—」(『仏教学報』三四、一九九七年)(ハングル文献)

この論文では新羅・瑞鳳塚出土の銀製盒にみえる「延寿元年」の年号

との類似から「延嘉七年」を高句麗・長寿王代の年号とし、その治世の七年である四一九年と断じている。しかしながら、同じ論文で、この銘文にみえる千仏信仰と関係する經典群(『賢劫千仏名経』など)の漢訳年代が六世紀初めであり、これらが高句麗に伝来する以前に延嘉七年銘金銅仏が造像されたと述べており、經典の翻訳時期を根拠としている。

(9) ここでふれた年号比定論についての議論については、下記論文を参照した。

チョン・ウンヨン「金石文にみえる高句麗の年号」(『韓国史学報』五、一九九八年)(ハングル文献)

(10) 『賢劫経』巻第六(大正新脩大藏経第一四卷四六頁上段)では「仏告喜王菩薩。當歎頌斯諸菩薩。等於賢劫中當成仏者。所有名号」とあり、

続いて「拘留孫」以下の仏名が列挙され、そのなかの二九番目に「因現義」とみえている。

(11) 金煥泰「賢劫千仏信仰」『三国時代仏教信仰研究』(仏光出版社、一九九〇年)(ハングル文献)

(12) 金煥泰「賢劫千仏信仰」(前掲)

(13) チョン・ソニョ「六世紀高句麗の仏教信仰」(『百濟研究』三四、二〇〇一年)(ハングル文献)

(14) 大西修也「日韓古代彫刻史論」前掲注(1)六五〜六頁

(15) 禿氏祐祥「敦煌遺文と仏名経」西域文化研究会編『敦煌仏教資料』西域文化研究第一(法蔵館、一九五八年)

(16) 井ノ口泰淳「敦煌本「仏名経」の諸系統」(『東方学報』三五、一九六四年)

(17) チョン・ソニョ「六世紀高句麗の仏教信仰」前掲注(13)

(18) 賀世哲「関于北朝石窟千仏圖像諸問題」(『敦煌研究』一九八九年第三期)(中国語文献)

(19) 莫高窟の千仏圖像の事例と時期等に関しては下記論文を参照した。寧強・胡同慶「敦煌莫高窟第二五四窟千仏画研究」(『敦煌研究』一九八六年第四期)(中国語文献)

劉永增「千仏圍繞式説法図」与《觀仏三昧經》（『敦煌研究』一九九八年第一期）（中国語文献）

賀世哲「関于北朝石窟千仏圖像諸問題」前掲注（18）

(20) 賀世哲「関于北朝石窟千仏圖像諸問題」前掲注（18）

賀世哲「関于北朝石窟千仏圖像諸問題」前掲注（2）（中国文）七二〜八二頁

(21) 敦煌莫高窟第二五四窟の年代については、北魏中期の四六五年から五〇〇年頃と推定されている。

樊錦詩・馬世長・関友恵「敦煌莫高窟北朝石窟の時代区分」敦煌文物研究所編『敦煌莫高窟』第一卷（平凡社、一九八〇年）

(22) 梁曉鵬「敦煌莫高窟千仏圖像研究」前掲注（2）一三九〜一四六頁

(23) 温玉成「龍門古陽洞研究」（『中原文物』特刊、一九八五年）（中国語文献）

(24) 賀世哲「関于北朝石窟千仏圖像諸問題」前掲注（18）

(25) 『無量寿經』の五十三仏については下記論考を参照した。
池田勇諦「大経五十三仏章の意味するもの」（『同朋大学論叢』二四・二五、一九七一年）

(26) 賀世哲「関于北朝石窟千仏圖像諸問題」前掲注（18）

(27) 梁曉鵬「敦煌莫高窟千仏圖像研究」前掲注（2）三一〜三四頁

(28) 劉永増「千仏圍繞式説法図」与《觀仏三昧經》前掲注（19）

(29) 劉永増「千仏圍繞式説法図」与《觀仏三昧經》前掲注（19）

(30) 千仏圖像については『法華經』見宝塔品に依拠して制作されたというのが、従前の一般的な見方であり、そのなかでも敦煌石窟については隋代の千仏圖像について、他の仏典の影響を否定し、これを強く主張する説も提示されている。小山満「敦煌隋代石窟の特徴」（『創大アジア研究』一三、一九九二年）

これに対し、本論でとりあつかっている敦煌第二五四窟は、傍題の存在から、仏名經典に依拠することは明白であるが、いうまでもなく、地域や時代および表現方法の異なる千仏圖像のすべてを仏名經典に依拠すると考えるわけではない。

(31) 南北朝期の石窟の特徴については下記文献を参照した。

宿白「中国石窟寺研究」（文物出版社、一九九六年）（中国語文献）

宿白「早期佛教遺跡与石窟寺遺跡の分布」（『中国佛教石窟寺遺跡…3 至8世紀中国佛教考古学』（文物出版社、二〇一〇年）（中国語文献）

劉策・余增徳編著『中国的石窟』（上海文化出版社、一九九六年）（中国語文献）九〜二〇頁

また、南京・栖霞寺石窟については下記論文を参照した。
符永利「浅論栖霞山石窟的供養人問題」（『長江文化論叢』二〇一二年版）（中国語文献）

項長興「栖霞寺千仏岩石窟滄桑」（『江蘇地方志』二〇〇二年第五期）（中国語文献）

項長興「栖霞寺千仏岩石窟尋覓仏龕題刻總跡」（『敦煌研究』二〇〇六年第二期）（中国語文献）

(32) 広元市文物管理所・成都市文物考古研究所・北京大学考古文博学院「広元皇沢寺石窟調査報告」（『四川文物』二〇〇四年第一期）（中国語文献）

(33) 郭麗英（京戸慈光訳）「中国ならびに日本における仏名の読誦」牧田諦亮監・落合俊典編『中国撰述經典（其之三）』七寺古逸經典研究叢書第三卷（大東出版社、一九九五年）

(34) 以上の仏名經の成立と仏名信仰の展開および下記の徳美の事例については注（33）文献を参照した。

(35) 『統高僧伝』卷第二十九・唐京師会昌寺釈徳美伝八
因往太白山誦仏名經一十二卷。每行懺時誦而加拜。人以其總持念力功德涅槃。（大正新脩大藏經第五〇卷六九七頁上段）

(36) 『統高僧伝』卷第二十九・唐京師会昌寺釈徳美伝八
武徳之始、創立会昌。又延而住、美乃於西院造懺悔堂、像設嚴華堂宇宏麗、周廊四注復殿重敞。誓共含生断諸惡業、鎮長礼悔潔淨方等。凡欲進具必先依憑、蕩滌身心方登壇位。又於一時所汲浴井忽然自竭、徒衆駐立無由洗懺。美乃執爐臨井、苦加祈告、応時泉涌。還同恒日、時共宗焉。（大正新脩大藏經第五〇卷六九七頁上段）

(37) 『弘明集』卷第一六所収の梁簡文帝の千仏願文に「而善生一念敬造千仏」（大正新脩大藏經第五二卷二〇九頁上段）とみえる。

(38) チョン・ソニョ「六世紀高句麗の仏教信仰」前掲注（13）

(39) 以下に摘要した『賢劫經』の内容とそこにみえる称名思想については下記の論文を参照した。

畝部俊英「『賢劫經』における称名思想」（『同朋大学論叢』六一、一九八九年）

(40) 『過去莊嚴劫千仏名經』

若有善男子、善女人、聞是三世三劫諸仏名号、歡喜信樂、稱揚讚歎、歸命頂礼、復能書寫、為他人説、或能画作、立仏形像、或能供養香華、妓樂、歎仏功德、志心作礼者、勝用十方諸仏国土、滿中珍寶、純摩尼珠、積至梵天、（『大正新脩大藏經』第一四卷三七頁上段）

(41) 寧強・胡同慶「敦煌莫高窟第二五四窟千仏画研究」前掲注（19）

梁曉鵬「莫高窟第二五四窟千仏文本的符号学分析」（『敦煌学輯刊』二〇〇五年第二期）〔中国語文献〕

（もんた せいいち 歴史文化学科）

二〇一二年十一月六日受理